

# ○ 令和3年度 学校評価総括表

教育目標	○自ら学び、自ら考える力を育成し、創造的な能力を培うとともに、健康で心身ともにたくましい生徒を育てる。 ○真理を見極める目を養い、正しい判断力と強い意志のもと、自律的な生活態度を育てる。 ○人権尊重の精神を培い、自己敬愛に基づく人間関係を深め、社会連帯の精神を養う。		総合評価
運営方針	○本校の「自主自立、自由闊達」の校風と「文武両道」の伝統を受け継ぎ、新しい時代の流れを踏まえ、進取で創造的な教育を推進する。 ○全教職員が、目指す学校像・生徒像を共有して、組織力と個々の技量を最大限に発揮する中で、教えることと教えられることに喜びと感動のある学校づくりを推進する。 ○生きる力を育成することを目指して、課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育む。そして、生徒の言語活動の充実や主体的に学習に取り組む態度・学習習慣の定着を図るとともに、人間としての在り方生き方に関する教育を一層推進する。		
令和2年度成果と課題	本年度の重点目標	具体的目標	
新学習指導要領に伴うカリキュラムマネジメントの研修に基づき、教育課程委員会等で熟議を繰り返し、教育課程や進路選択に応じた講座を編成した。本年度は更なる学力向上と生きる力を育成するため、組織的な体制作りを推進する必要がある。 また、スクールカウンセラーや特別支援教育支援員との連携や生徒支援委員会も機能し始め、計画通りに進んできた。生徒に対する指導においても丁寧に取り組、自らで判断し行動できる生徒の育成が行われた。 更なる規範意識向上のための取組の継続が必要となる。	夢と希望の実現を可能にする確かな学力の育成する。  豊かな心で、人と調和・協働できる人間関係構築力を培う。	・「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業を展開する。 ・計画的・系統的な進路指導とキャリア教育の充実を図る。 ・休日講座等の実施による学力補充を実施する。 ・あいさつ指導の徹底と自己及び他者を大切にすることを育成する ・生徒が主体的に参画する学校行事を実施する。 ・地域とつながり、地域に貢献するボランティア活動を推進する。 ・各教科及び総合的な探究の時間の授業において、言語活動を充実させる。 ・創立100年の伝統をふまえ、多くの卒業生や関係の方々を鑑みつつ、次世代を担う社会人となりうる生徒を育成する。 ・「地域と共にある学校づくり」をとおして、感謝や奉仕の精神を養う。 ・幅広い学習活動や特別活動、部活動やキャリア教育に関する活動などの充実する。	A
	困難にうち克つ体力・精神力・社会参加意識を養う。	・体育系・文化系の両部活動の活性化による「文武両道」を実現する。 ・体育行事等を通じた体力、精神力を育成する。 ・小・中学校との連携、地域活動への参加等を通じた社会参加意識を醸成する。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策	
学習指導	教科学習や特別活動・部活動等を通じて、主体的に学び、生涯にわたって学び続ける学習者の養成を推進する。	生徒・保護者の進路希望を正確に把握し、その実現に向け、「変化の激しい不確実な時代を生き抜く力」の育成を目指した教育を行う。	学校改善アンケートで「信頼や願いに応える学校づくりができていくか」の質問に対し、90%以上の賛同を得る。	A	「信頼や願いに応える学校づくりができていくか」の質問に対し、92%以上の賛同を得た。	新型コロナウイルス感染症の拡大防止に対する様々な取組を可能な限り行うことができた。	・「教員による授業見学」は、授業力の向上につながり、有効な研修となるので今後も継続する。そして、その回数も大切であるが、どのような授業を行うのかも大切であり、指導者が授業を行う観点と参観する側の評価観点を明確にする必要がある。 ・各教員がアクティブラーニング手法を積極的に取り入れた授業を実施するなど、授業自体の質の向上を図る。	
		生徒の興味関心や進路の多様性を踏まえ、「めざす学校像・生徒像」を具体的に反映する教育課程を工夫し編成する。	生徒による授業評価アンケートで「生徒が授業に意欲的に取り組んでいるか」の質問に対して80%以上の賛同を得る。	B				
	基礎・基本のより確実な定着と、生徒の意欲的な学習の定着化を図る。	課題テストなどにより生徒個々の基礎学力を把握し、生徒が能動的に学習できるよう授業改善に取り組む。	学校改善アンケートで「学力向上を図るため、適切な授業を行っているか」の質問に対し、80%以上の賛同を得る。	B	A	「学力向上を図るため、適切な授業を行っているか」の質問に対し、75%の賛同を得た。		アクティブラーニングの手法を積極的に取り入れるなど、生徒個々の自己肯定感を高め、意欲的な学習につなげていく。 日々の学習を大切にするため、ワークシート、確認テスト等を活用し、生徒が主体的に学習に取り組めるよう工夫する。
		授業を大切にするとともに、家庭学習の重要性を伝え、「予習→授業→復習」の学習サイクルを習慣付けるよう指導する。	家庭学習時間調査を行い、1・2年生の家庭学習時間の平均を2時間以上にする。	B		6月の集計では、1年132分、2年142分であった。11月の集計では、1年82分、2年116分であった。		落ち着いた学習環境になりにくい状況ではあるが、先生方の指導で概ね例年と同様の時間であった。
		授業力の充実と生徒の「確かな学力」の伸長を図る。	「授業研究の週」を年間5回設定し、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、教員の授業力を向上させる。	教員による授業見学(校内外)を全員が5回以上行う。また、校内研修を年間1回行う。	A	A		コロナ禍の中ではあったが、先生方の授業見学の平均回数は4.3回であった。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果			成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
生徒指導	教員間の生徒指導に対する共通理解と共通指導を図る。	教員からの積極的な挨拶や声かけにより、挨拶の徹底を図る。	校門等での挨拶の自己評価を95%以上にする。	A	A	A	自己評価は96%だが、自ら先に挨拶できるように、教員側から積極的に働きかける。	部活動加入率が高い点をいかし、指導を徹底していく。	・学校運営協議会委員より、生徒が礼儀正しく行動している様子がうかがえると、評価をいただいている。これまでに以上に、校内外で気持ちのよい挨拶を積極的に実行できるように雰囲気を作成する。
		チャイム着席と遅刻生徒の個別指導を行い、時間厳守の徹底を図る。	遅刻を前年度比10%減にする。	A			前年度は休校期間もあり、単純に比較はできないが、今後の増加に注意する。	時間ギリギリになることが多い者に対して継続的に指導する。	
		清掃活動の徹底・自転車駐輪場の整理整頓など生活マナーの向上を図る。	校内のゴミをゼロにする。自転車の整然とした駐輪状態を保つ。	B			限られたスペースの中では比較的整然さが保たれており、今後も継続していく。	生活委員等にも協力を要請するなど、啓発活動を行う。	
	規範意識の涵養を図る。	定期的な身だしなみ点検を実施し、服装・頭髪等を整えさせる。	身だしなみの自己評価を90%にする。	A	A		ほとんどの生徒はきちんとできているが、100%を目指して継続指導していく。	気付いたときに見逃さずに指導していく。	
		立哨・乗車指導等により、公共交通機関や通学路におけるマナー指導を徹底する。	マナーの自己評価を90%にする。	A			狭くて交通量の多い中、99%以上の自己評価で良好な状態を保っている。	立哨指導の継続により安全な登下校指導とマナー向上に努める。	
	事故防止と緊急時の適切な対応力を養成する。	SNSや防犯、薬物乱用、交通安全等についての危機管理意識の向上を図る。	登下校時の事故や犯罪被害をゼロにする。	B	B		不審者侵入による盗難事件が発生。今後の危機管理システムの強化徹底に取り組む。	学校全体として再発防止のため日ごろから安全対策の周知徹底を図る。	
		交通安全や情報機器等における問題について啓発文書等を配布し、意識向上を図る。	生徒のアンケートにおいて、自己評価を90%以上にする。	A			99%以上の自己評価であり、今後も安心・安全な環境づくりに努めていく。	啓発とともに、アンケート等を実施し、自らの行動を点検させていく。	
	教育相談体制の充実に努める。	全校生徒と面談するとともに、スクールカウンセラーと協力しながら、心身の悩みを抱えた生徒の早期発見と適切な指導を行う。	悩みを抱える生徒や不登校傾向生徒等について、早期の適切な対応と改善を図る。	A	A		上級生になるにつれ、また、回数を重ねるごとに会話のキャッチボールがスムーズになってきた。今後も継続していく。	情報共有を十分に行い、多くの目で生徒の見守りができるように取り組んでいく。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策	
進路指導	早い段階から将来設計や自己実現への高い意識をもたせる。	模擬試験実施時に事前学習や復習をする際、デジタルサービスの利用を促し、習慣付ける。	ポートフォリオの利用も含め、模擬試験受験時にデジタルサービスを利用した生徒を1、2年生で80%以上にする。	B	B	学年やクラスに差はあるが、模試の事前準備をした生徒は48%、復習をした生徒は44%、デジタルサービスを利用した生徒は52%であった。	学年の進路指導部と担任が連携し、進路実現に必要な能力を育成できるように定期的に活用計画を案内し、指導する。	・生徒が将来的につきたい具体的な職業や大卒での職種を定め、進むべき進路を決めることが基本である。そのためには家庭だけでなく、学校でも職業についての情報を提供し、選択肢を増やす。 ・「1、2年の家庭学習の平均時間を2時間以上にする。」という評価指標を挙げられているが、是非とも多くの生徒がこの指標をクリアし、安定した学力育成が達成できるように指導を継続する。
		進路委員の活動として、生徒向けの進路ニュースレター「進路のすゝめ」を発行し、生徒自らの力によって、キャリア発達を促す。	ニュースレター「進路のすゝめ」を年間3回、発行する。	A		進路委員が原稿を担当し、1学期には学校生活と学習方法、2学期には類型・科目選択、3学期には大学入学共通テストをテーマに発行した。	進路選択への意識を高めるため、今後も調べ学習や調査を主体にした委員会活動にしていく。	
	主体的で意欲的な学習を促進し、生徒の進路実現なものにする。	HRや集会等をとおして主体的かつ意欲的に学習に取り組むことを促し、部活動顧問とも連携をとりながら、家庭学習の習慣化を図る。	1、2年生の家庭学習の平均時間を2時間以上にする。	B	A	家庭学習平均時間は、6月の集計では、1年132分、2年142分であった。11月の集計では、1年82分、2年116分であった。	担任や部活動顧問と連携し、進路行事を利用して学習習慣の定着を可視化し、指導に活かす。	
		GTEC(3技能)を実施し、英語科や学年と連携しながら、1、2年生の生徒の英語力を向上させる。	夏期休業中にGTEC付属の「スキルUPワーク」を配布し、Webサイトも活用しながら、生徒個人の4技能レベルに応じた課題に取り組ませる。	A		10月末実施のGTECの夏期休業課題としてワークを配布し、クラス毎に回収していただいた。前年度比較では1、2年生ともスコアが伸び、上位者が増えていく。	進路実現には英語力のアップに加えて外部検定試験の資格が有効であることを周知し、学年に応じた資格取得を奨励していく。	
		放課後や休日に実施する実力養成講座をさらに充実させ、進路実現に向けて学力を伸ばさせる。	3年生の実力養成講座(夏期及び2学期)の出席率を90%以上にする。	A		夏期休業中は、耐震工事のため経済会館と本校で実施した。年間を通して95%の出席率であった。	各教科と協力し、学力の3要素定着に適した魅力ある講座を企画立案していく。	
	一人一人の願い、適性等に基づく進路選択を促し、進路目標の実現を図る。	進路説明会や進路セミナーの開催、オープンキャンパスの紹介等により、将来について考える機会をつくり、進路選択能力を高める。	進路目標が「未定」である生徒の割合を、3学期に調査し、1年生で10%以下、2年生で5%以下にする。	A	A	進路目標が「未定」である生徒は、1年6.2%、2年0.9%であった。	学期毎の進路行事を通して、今後も生徒の進路選択の一助となる機会を提供していく。	
		生徒・保護者に向けた「進路だより」を発行し、進路に関する最新の情報を発信して、夢と希望の実現を図る。	「進路だより」を学年ごとに、1、2学期それぞれ2回発行する。	A		1、2学期中間考査後と学期末の三者面談時に学年毎に発行し、広く情報共有ができた。	大学入試改革の内容や社会情勢に合わせた最新の進路情報をタイムリーに発信していく。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果			成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
				A	B	A			
特別活動 ・部活動	生徒一人一人の自主性・創造性・協調性を育成し、学校行事の活性化を図る。	生徒会が中心となり学校行事の内容やボランティア活動等を企画し、全校生徒に協力を呼びかける広報活動に積極的に取り組む。	「生徒会だより」などを通じた広報活動を年に5回以上行う。	A		A	11月に新しい生徒会がスタートし、さらに広報活動を続けていく。すでに「生徒会だより」を3回出しており、年度内に5回発行する予定である。	「生徒会だより」とともに、学校HPを充実させ、生徒会の情報を発信していく。	・部活動の加入率についても、評価指標とする必要がある。 ・地域との協働推進事業について学校と地域の双方向の関係が必要であるが、今年度の示した目標および内容は、学校から地域へ向けての事業である。地域から学校への事業も今後検討する。
		文化祭が安全に実施できるように計画を立て、生徒全員参加の魅力的な内容を創り上げる。	事後アンケートで文化祭に対する生徒の肯定的な評価が90%以上になるようにする。	B			文化祭当日は全員参加であった3年生でアンケートを実施したところ、肯定的な評価であった。	文化祭に対する生徒の強い思いに答えるべく、安全に実施可能な内容を模索していく。	
	生徒に「地域と学校とのつなぐ意識・参加意識、奉仕の精神を培う。	生徒会執行部が中心となり学校周辺地域での挨拶運動、地域連携委員会が主体となり、地域の小学校・中学校・高校・病院等と連携し、地域の清掃活動や交通安全運動等の活動をさらに推進し、生徒の規範意識を醸成する。	それぞれの活動をトータルで企画し、年間5回以上実施対象施設と連絡を密にし、年間5回以上実施する。	A	A	A	4種類の募金活動で延べ10回実施し、挨拶運動は1~3学期で合計12日行った。今後は、感染症の状況を見据えながらさらに校外にも活動を広げていきたい。	感染症の影響で校内向けの活動にシフトしたが、地域からの単発の行事も行うことができたので、今後も臨機応変に計画を立てて実施していく。	
	部活動をとおして生徒の規範意識を高め、社会で生きる基本的な力を身に付けさせる。	部活動集会や部活動キャプテン会議等をとおして、生徒に規律やマナーの大切さを指導し、挨拶や部室周辺の清掃、節電などを徹底させる。	部活動生徒を中心に、挨拶できる生徒を100%にし、活気ある雰囲気作りを心がける。	B	B		キャプテン会議などを通じ、挨拶をすることによって、よりよい環境を作っていこうと呼びかけていく。まだ活動は発展途上である。	挨拶など、各部活動を中心にしなが、全校生徒に広げていく努力をしている。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果			成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
人権教育	現代社会に根強く残る様々な差別の背景にある歴史を正確に学び、人権尊重の精神を培う。同時に、人権教育推進のための教職員の実践力向上を図る。	様々な人権問題に関わっている方を講師とする人権教育講演会を開催する。また、生徒向けの人権に関する推薦図書を紹介する。	学年別の人権教育講演会を、年1回開催する。推薦図書を、年間数冊程度紹介する。	A	A	A	第1・2学年共、各学年別人権教育講演会を開催した。推薦図書については、2冊程度しか紹介できなかったのですが、今後も継続して紹介していきたい。	推薦図書の紹介については、『ニューズレター』をとおして、タイムリーな作品を紹介することも検討したい。	・来年度は全人同教研究大会が奈良県で開催される。多くの教員が全体会ならびに各分科会参加し、研鑽を積む。 ・ヒューマンライツ部の活動を活性化させる。
		ヒューマンハート委員会やヒューマンライツ部の活動を活性化し、生徒主体の人権啓発活動を促進する。	『ニューズレター』を年間6回発行し、文化祭で委員会の展示発表を行う。他校の生徒との交流会に、委員が年2回程度参加する。	A			『ニューズレター』は予定どおり発行した。また、文化祭ではヒューマンハート委員会・ヒューマンライツ部合同の展示発表を行った。11月に開催された研修交流会に参加した。	ヒューマンハート委員会をとおした人権啓発活動については、継続的に促進していく。	
		P T A人権教育研修会や各種研究団体主催の人権教育研修会への教職員の参加を促し、研修を深める。	校外の各種研修会への参加率を80%以上にする。	B			9月末までの多数の各種研修会は中止となった。11月以降開催の研修会への参加促進に努めたが、参加申込み後の欠席が多かった。(参加率64%)	各種研修会年間予定が発表され次第、迅速に参加者を決定し、全教職員に確認を行っている。今後も全教職員の参加促進に努める。	
	地域や家庭と連携し、人権教育推進を図る。	大和高田市人権教育研究会と連携しながら、人権教育推進に努める。	大和高田市人権教育研究会主催の研修会に、年2回程度参加し、研修内容を活用する。	A			9月末までの研修会は中止となった。1月末の研究大会(オンライン形式)には3名参加する予定であったが、中止となった。	主要な研修会には複数名参加し、地域との連携を図る。	
	保護者には、P T A人権教育研修会や学年別人権教育講演会への参加を促す。また、校内人権作文集『思いを重ねて』を発行・配布し、保護者の読後感の返信をとおして、生徒と保護者が共に考える機会とする。	保護者の参加数を、30名以上にする。保護者からの読後感返信数を、30部以上にする。	A	A	校内で開催する研修会には参加協力を得たが、校外で開催予定であった研修会は2度延期となったため、案内ができなかった。(校内18名参加)また、11月初旬に人権作文集を発行・配布し、保護者の読後感の返信依頼をした結果、53名より返信があった。	次年度の校内人権作文集に、本年度の保護者の読後感および、校内講演会参加者の感想・意見を掲載することにより、家庭との連携を図る。			
奨学金	経済的側面からの進路保障に努める。	各種奨学金の案内と申請手続きを確実に行う。	各種奨学金申請希望者全員に、適切な対応を行う。	A	A	A	各種奨学金・奨学給付金申請希望者には申請手続きに関する説明会を実施し、保護者への確認連絡も取りながら確実に申請手続きを行った。	申請手続きに関しては、年々多様化・複雑化する傾向にあるため、生徒への説明会開催と保護者への個別対応を継続して行う。	・全生徒への通知について、迅速にかつ分かりやすく実施する。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策	
読書指導 文化学習	読書環境を整え、読書習慣を定着させる。また、読書で得た感動を共有したり発信したりする力を付ける。	「マーサータイム」にあわせて図書広報紙「知新」を発行し、図書委員を中心に「マーサータイム」の事前指導を行う。HPや掲示で新着案内やおすすめの本の紹介を行う。	「知新」を春夏秋冬4回、発行する。年間3回、図書委員によるおすすめの本の紹介を実施する。「知新館NOW!」のタイトルでHPの更新を、また、職員玄関前電子黒板で、新着図書案内を年間8回以上行う。	A	A	「知新」は予定どおり4回発行した。図書委員によるおすすめの本の紹介は2回実施。HP、職員玄関前電子黒板での読書啓発は図書館関係行事とタイアップして10回以上実施し、読書を推進することができた。	こまめにHPを更新したり、掲示をしたり、生徒の目に届くところに「読書」を啓発する仕掛けをすることが読書の推進に繋がると考える。マーサータイムの効果的な実施方法を検討し、図書委員による取り組みを継続しながら読書習慣を定着させたい。	・コロナ禍で、縮小せざるを得ない行事もあったが、読書タイム等に関しては、計画通りに実施することができた。 ・読書感想文や読書感想画の作成について、今後も、国語科、芸術科、HR担任と連携した指導を展開する。 ・ビブリオバトルの実施と、その充実を図る。
		国語科、芸術科、HR担任と連携し、読書感想文または読書感想画を作成させる。優秀作品を各コンクールに出品する。	読書感想文または読書感想画を作成する意図を理解させ、提出率を95%以上にする。	B		読書感想文または読書感想画の作成意図について、プリントで配布して周知。提出率は96%と高いが、読書によって得た感動や気付いたことについて触れている作品が極めて少ないことが課題である。	どのような本と出会うかによって、発見や感動が変わってくると思う。次年度は選書の大切さについても啓発したい。	
		第1学年各探究時に「ビブリオバトル」の予選を実施し、本をとおして自分の思いや考えを伝える力をつける。その後全学年に参加を呼びかけ、「知新のつどい」として本戦を実施する。	本戦参加生徒数を40人以上にする。	A		第1学年各探究時に、全てのクラスで「ビブリオバトル」の予選を実施することができた。本戦は11月9日(火)に観戦者を制限して実施したが、参加者54名で盛会となった。	ビブリオバトル実施後のアンケートでは「本を読む時間が増えた」「伝えたいことをまとめる方法が分かった」と回答した生徒が100名を超え、一定の成果が認められる。継続して実施していきたい。	
		「知新館のおすすめ100冊」の選定を行い、群鳩祭で展示する。	HP、掲示、図書委員による校内放送を通じて応募を呼びかけ、応募数を200冊以上にする。	B		目標の応募数200冊には及ばなかったが、図書委員による校内放送での呼びかけを3回実施し、147冊の応募があった。	生徒自ら読書の推進者となるよう、図書委員を中心に今後も活動を進めたい。	
	芸術・文化への理解・関心を深める。	芸術鑑賞会(創立100周年記念行事)を実施する。学年集会やHRで事前学習を行い、鑑賞のマナーや公共交通機関利用のマナーを意識付ける。	事後アンケートを行い、鑑賞後の満足度を95%以上にする。	-		本年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止とし、次年度に持ち越す計画を立てた。	令和4年度6月に第3学年で実施、10月に第1学年で実施することを計画している。	
		第1学年および国語科と連携し、「新春小倉百人一首かるた大会」を実施する。事前学習を行って百人一首の和歌を覚えるよう促す。	奈良にゆかりのある和歌を中心に、10首以上覚えた生徒を50%以上にする。	A		予選は感染症拡大防止に対応し、フォームによる回答方式で実施、本戦は新型コロナウイルス感染症拡大傾向にあったため中止した。大半の生徒が10首以上正解しており、さらに全回答のうち奈良にゆかりのある和歌7首を含む23首が3割以上の正答率であった。	事前に練習も行い、意識付けをすることができた。古典に親しむ機会となるよう今後も継続していきたい。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果		成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策		
健康安全	新体力テストの結果を踏まえ、体育の授業・体育行事の内容の充実を図り、体力の向上やスポーツライフを継続する資質や能力を育てる。	体育の授業において、体づくり運動やトレーニングを積極的に取り入れ、個々の体力の向上を図る。	新体力テストの総合判定A評価を、全体の15%以上にする。	A	A	新体力テストの総合判定A評価は、全体の14.4%である。コロナ禍の影響で体力低下があり、今後体力維持を図っていく。	体育の授業において、体力の維持向上をより目指し、個々の体力・免疫力の向上を図る。	・文武両道の校風をからすると、「体育大会」の充実度を図る評価指標も必要である。 ・健康診断等の結果をしっかりと確認し、生徒自らの健康状態を把握、改善に努めるなど自己管理能力を高める。		
		体育系部活動の加入率を向上させる。	体育系部活動の加入率を55%以上にする。	A					体育系部活動の加入率は、61.5%である。	生徒会指導部と協力を図り、体育系部活動の加入率を向上させる。
		体育行事を、生徒が自主的・主体的に企画・運営できるように、実施種目を考えさせる。	体育やスポーツが好きと言える生徒を90%以上にする。	B					授業アンケートにおいて、意欲的に参加している生徒は、81.7%である。(コロナ禍の影響あり)	体育行事をさらに充実したものにできるよう、工夫し、各分掌と連携する。
	生涯をとおして健康的な生活を適切に管理していく資質や能力を育てる。	健康診断等により自己の健康状態を把握し、改善に努めるなどの自己管理能力を高める。	精検受診率を昨年より向上させる。 (内科・心臓疾患50%)	B		内科検診・心臓疾患の精密検査受診率は、49.8%である。	情報提供及び医療報告書等の再配布、オンラインによる呼びかけ等、各自の健康の保持増進を呼び掛ける。			
		生徒対象の救急法の講習を実施し、AEDの使用法や心肺蘇生法等を理解させる。	運動部員の90%以上受講させる。	-		新型コロナウイルス感染予防対策のため、講習会を実施できなかった。	オンラインによる視聴等、新たな方法で実施できる方法を考える。			

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果		成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策			
広報活動	学校ホームページで、より迅速で正確な情報の発信を行う。また、閲覧回数が増えるよう更新回数を増やす。	5月に職員研修を実施し、技術的なサポートを行うことで教職員に活用してもらい、保護者への情報提供に努める。また、部活動の公式戦などの時期に合わせて「更新強化月間」や「ホームページ更新強化日」を設定する。	ホームページのログ等で更新回数や閲覧回数を集約する。 昨年度までの目標から50%増の年間360回以上の更新回数と、毎月15000回以上の閲覧回数を目標とする。	B	B	毎年定期的に職員研修を実施することで、新型コロナ対策や休校などの一時的なものを除いても更新回数は着実に伸びてきている。 閲覧回数が評価指標の80%の12000回を下回った月が数回ある。	目標とする評価指標がやや高すぎたように思われるが、目標を下げることも取組を進めたい。 ホームページ更新は、InstagramやTwitterのような感覚で日々のアップを大切にしたい。	・学校発行のPTA広報、学校新聞、学校案内について、見やすく紙面に工夫がなされているという評価をいただいている。今後は、実体験が綴られている先輩のメッセージ欄を充実させるなど工夫を凝らす。 ・ホームページ更新は、InstagramやTwitterのような感覚で日々のアップを大切にしたい。			
		『学校案内』の内容を見直し、特に写真については更新していく。	完成時期を6月中旬までを目標とする。 写真については、20%以上の更新を目標とする。	A					A	本校の教育方針・教育課程・進路状況・部活動・目標とする生徒像について更新した。卒業生のコメントも充実させ、「探究」も現状に合わせた内容にした。	生徒がマスクを着けているため、写真の更新が難しい状況である。今後はスクールポリシーを踏まえ刷新することも考えたい。
		オープンキャンパスにおいて、入学希望者に本校の教育活動を理解してもらう。	部活動については、全ての部に紹介ビデオや写真を用意してもらう。 中学生からの申込数が昨年度を上回ることを目標とする。	A					A	本校でのビデオ等の準備は、十分であったと思われるが、県教育委員会の方針に合わせて、受付期間を7月から12月までの長期にしたため盛り上がる時期がなく、中学生などからの申込数は約700名であった。	以前のようなオープンスクールがまたできるようになるかは不透明であるが、中学生の関心が高い部活動、保護者に向けた学校生活や進路状況を、ホームページで広報していきたい。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果		成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
環境美化	環境美化に対する生徒の意識を高める。	通常清掃や大掃除等、校内美化を徹底する。特に教室の学習環境を整える。	学期ごとに清掃・環境美化に関するアンケート調査を実施し、年度末に評価を行う。	B	A	アンケートでは大掃除の時間配分や人数配分、清掃場所についての問題提起があった。教室はクラスによって整備状況に差が見られる。	全員清掃の形態での大掃除の方法変更は難しいが、工事も終わったので来年度は除草作業なども入れていきたい。 教室の学習環境については生徒のみならず教員の意識も重要である。	・生徒が安全面、衛生面で快適に学校生活を送るためにはトイレや手洗い場等を清潔かつ機能的に保つ必要がある。指標を達成させるために、具体的な目標をたてる必要がある。(例)トイレの改修 ○○年度 ○室以上 ・地域清掃活動で、町内のゴミの清掃をしており、学校周辺の方々から好評価を頂いている。今後はより一層充実させたい。
		通学路を中心にコースに分かれて地域清掃を実施する。	1学期と2学期に1回ずつ設定して実施する。	A		1学期は天候不良のため予備日に実施。2学期は予定どおり実施できた。	来年度から、1年生の中間考査がなくなるので、実施日を考慮する。	
	防災意識の充実を図る。	防災避難訓練をシェイクアウト訓練とともに、消防署の指導のもとに5月に実施する。	密を避けるため時差避難とし、各学年とも、避難開始後7分以内に安全に避難を完了する。	A	A	5月に予定どおりシェイクアウト訓練と避難訓練を実施した。避難経路が工事のため複雑であったが、特に大きな問題なく実施できた。	来年度もシェイクアウト訓練と避難訓練をかねて行う予定であるが、感染症の状況をみて、形態を考える必要がある。	
		生徒への防災情報の提供を行う。	防災情報の教室掲示を行い、防災意識を高めさせる。	B		「避難勧告」の廃止にともなう変更事項を教室掲示して注意をよびかけた。生徒による防災広報の作成はできなかった。	来年度は防災広報を発行したい。	
	美化委員会活動の活性化を図る。	学年ごとに地域関連事業、防災や美化に関する啓発活動、校内の緑化・美化活動について計画し実施する。	地域清掃、美化等の啓発ポスターの作成、群鳩祭の美化活動、植栽、プランターの灌水などを行う。	A	A	美化・防災の啓発ポスターを作成して校内に掲示した。春から夏にかけてプランターの灌水、百周年記念の花文字作製、チューリップの植え替えなど、美化委員会活動を活発に行った。	百周年の花文字作製など、美化委員会活動は活発にできた。来年度もプランター等を活用したい。	
	清掃用具・用品の充実及び営繕の迅速化を図る。	学校施設設備の安全点検を定期的に実施し、事務室と連携を取りながら修理・改善を図る。	一斉安全点検を年6回実施する。	A	A	事務室とも連携して安全点検は実施できたが、経年劣化にともなう問題箇所の修理・改善は難しい状況にある。	耐震補強工事も全て終了したので、事務室と連携して、できるだけ問題箇所の整備をすすめたい。	



評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果		成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
教育 アンビシャス コース	主体的に学ぶ姿勢を促し、コミュニケーション能力や幅広い教養を身に付けさせる。	個人研究やグループ研究、ディベートやスピーチ大会等を実施し、生徒が主体的に、かつ協働して取り組む学習活動を充実させる。	学習活動に関する生徒アンケートにおいて、「大変よかった」「よかった」と肯定的に回答する生徒の割合を80%以上にする。	A	A	主体的・対話的な学習活動として個人研究やグループ研究、ディベートやスピーチ大会等を実施し、群鳩祭で展示も行った。各学習活動に関して、93%の生徒が肯定的であった。	生徒が主体的・対話的に学習するための様々な学習活動を実施し、その充実を図る。	・教育コースを中心に教育系の学部・学科に進学する生徒が増えつつある。「奈良県次世代教員養成塾」への参加や教育系大学の教員による出張講義等の影響が大きいと考えられるので、今後とも継続して取り組む。
	教育・教職に対する理解を深めるとともに郷土の教育への興味・関心を高める。	大和高田市内の小中学校において、「小学校体験実習」を実施する。	生徒アンケートにおいて、体験実習を肯定的に回答する生徒の割合を80%以上にする。	A	A	感染症予防対策を徹底し、実習先小中学校とも連携を密にして、「小学校体験実習」を実施した。実習日数は予定より2日少なくなったが、生徒アンケートでは、実習を肯定的に捉えた生徒の割合は100%であった。	新型コロナウイルスのため、予定通りに実習を行えなかったが、「小学校体験実習」は有意義な学習活動であるため、今後も実習先小中学校と連携しながら実施する。	
		教育アンビシャスコース生徒を、「奈良県次世代教員養成塾(前期プログラム)」に主体的に参加させる。	生徒アンケートにおいて、「奈良県教育への興味・関心が大変高まった」「高まった」と回答する生徒の割合を80%以上にする。	A	A	「奈良県次世代教員養成塾」第3学年コース生のうち33名が修了認定を受けた。第2学年コース生は17名が受講している。コロナ禍で、オンラインでの講座が多かったが、意欲的に取り組み、生徒によるアンケート結果は88%であった。	第2学年受講生は来年度も「奈良県次世代教員養成塾」を継続して受講するので、講座内容と「教育探究Ⅱ」の学習を関連させ、コース生全員の教育、教職に対する理解の向上を図る。	
	大学との連携を深め、進路実現に向けた取組を充実させる。	高大教育連携大学からの招聘講師による出張講義等を実施し、学習活動を充実させる。	講義内容に関する生徒アンケートにおいて、肯定的に回答する生徒の割合を85%以上にする。	A	A	奈良教育大学(4回)、京都女子大学(2回)、畿央大学、同志社女子大学、佛教大学や京都教育大学からの出張講義や演習を実施している。生徒へのアンケート結果は、97%であった。	新しい教育課程での学びにつなげていけるように、高大教育連携大学との連携をより深め、学習内容の充実に努める。	
		教育系大学及び教育系学部に対応した学習活動を充実させる。	小論文や面接、集団討議等、大学入試に対応した学習を実施する。	A	A	「教育探究Ⅱ」の授業において、志望理由書や小論文について外部講師による講義、演習を行った。進路実現に向け、面接、集団討論の学習にも取り組んだ。	進路実現につなげていくための学習計画を策定し、学習活動の充実を図る。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果		成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
				A	A			
総合的な探究の時間 (「探究」)	社会や世界に関心を持ち、主体的に学習に取り組、よりよく課題を解決していく態度を育成する。	専門家の招聘と現地学習の充実により学習意欲を高める。	外部講師の活用と校外活動を1回以上実施する。	A	A	計画の中止や延期、実施内容の変更等様々な工夫により、可能な限りの活動ができています。	より適切で的確な外部講師特別授業や校外学習を計画し、生徒の学習意欲を高める。	・生徒自ら選んだ探究のテーマ、および課題について深く考え、その課題解決へのプロセスを大切に授業展開を進めたい。また、生徒自ら考えた解決への提言を広く発表する場を設ける。
		コースの特色に応じて「奈良TIME」の取組を実施し、地域に根ざした学習を行う。	年間計画の中で、奈良の文化や歴史、地誌や環境に関わる学習を実施する。	A		新型コロナ感染症対策により、計画の変更はあるが、実施できている。		
	対話的・協働的な学習をとおして幅広いコミュニケーション能力を養う。	グループ学習を活発に行わせる。	各学期においてグループでの活動を必ず実施する。	B	A	活発なグループ活動とはできなかった部分はあるが、工夫をしながら実施している。	協働的で主体的な活動となるよう、より明確な課題設定ができるよう指導・助言を行う。	
		発表活動を重視し、レポート発表やスピーチ、実演など多様な形式の発表を行わせる。	ビブリオバトル・SDGs等も活用し、発表活動をより活発に、より充実させる。	A		ビブリオバトルも計画を変更しての実施となったが、最終発表会へのよい準備となった。	課題解決のプロセスを重視し、生徒の活動に寄り添い適切な助言をし、最終発表会を充実させる。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果		成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
				A	A			
学校事務	学校事務の効率化および会計の適正化を図る。	学校事務の効率化を模索するとともに業務の継続性を確保。会計業務の適正な実施に努める。	業務の効率化を一層推進する方策の実施、会計業務に関する諸規程に基づく業務の実施する。	A	A	諸規定を意識した業務を遂行し、定期監査においても、一定の改善の評価を受けた。しかし、依然として繁忙時の対応に苦慮しており、業務のさらなる効率化の模索が必要である。	複数での業務把握による齟齬の解消を図る。	・改修を要する箇所をわかりやすく管理し、学校と県担当課の間でも情報共有を図る。
	耐震工事を並行して、学校施設・設備の計画的な改修を推進する。	今年度に最終段階を迎える耐震工事を確実に進めるとともに、築後相当年数が経過し、劣化が進んでいる施設・設備の効果的な改修を図る。	耐震工事および修繕等を効果的に進めるとともに、要改修箇所の可視化を図る。	A		耐震工事について、学習環境の維持に努め、施工業者の協力も得られて工事も完了し、躯体の耐震化を図ることができた。一方、経年劣化により改修を要する箇所が設備を中心に依然として多くあり、優先順位も検討していく必要がある。改修を要する箇所をわかりやすく管理し、学校と県担当課の間でも情報共有を図る必要がある。		

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果			成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
第1学年	基本的な生活習慣の確立と学校生活の充実に努める。	時間厳守・挨拶の励行・諸規則の遵守を徹底する。	個々に応じた面談や声かけ等により、各学期において不注意による遅刻5回以上の生徒をなくす。	A			不注意による遅刻が増えた生徒が若干いたが、こまめな指導により、各学期において不注意による遅刻5回以上の生徒はいなかった。	生徒の規範意識向上を目指し、家庭との連携を密にし、全教員が粘り強い、継続的な指導を続ける。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭学習の習慣化の定着に向けた指導が大切である。</li> <li>・HR等での指導を通して、全員が学級役員や各種行事における役割を果たした。さらに、自主的・積極的に行動するよう指導していきたい。</li> <li>・個々に応じた面談を重ね、主体的に設定した進路目標に向けて粘り強く努力するよう、指導を継続する。</li> </ul>
		円滑な人間関係を積極的に築こうとする態度を育てる。	部活動や学校行事への参加を通じて、人間関係の大切さや集団活動の意義を理解させる。	A	A	A	生徒全員が部活動に加入し、充実した学校生活を送っている。また、HR等での指導を通して、全員が学級役員や各種行事における役割を果たした。さらに、自主的・積極的に行動するよう指導していきたい。	それぞれの責務を果たすことが人間としての成長に繋がることを、実感させる。	
		生徒観察・生徒理解に努め、保護者との連携を密にする。	学年便りを年間10回以上発行し、また毎月の行事予定を配布することで学校の様子を知らせる。	A			学年便りをこれまでに10回発行し、行事予定も毎月配布することにより、学校行事について、保護者への周知に努めた。三者懇談会でも保護者との連携を深めることができた。	三者懇談会だけでなく、学校行事やPTA行事など、保護者が来校される機会をとらえ、連携をさらに密にする。	
	進路に対する意識を高め、学習習慣の確立を図る。	変化する入試システムに関する的確な情報を提供するとともに、自主的な情報収集を促す。	模擬試験の受験とその振り返りの徹底を行う。	A			これまでに模擬試験を4回受験させ、必ず振り返るよう指導した。	復習することの大切さを実感させ、復習の習慣を定着させる指導を継続する。	
		予習復習を徹底させ、授業や定期考査・各種模試に向けた計画的な取組をさせる。	授業アンケートにおいて「授業の準備や課題等にしっかり取り組んでいる」生徒を80%以上にする。また、長期休業中は、学習習慣を乱すことのないよう、「学習の記録」をつけさせる。	B	A	A	2学期末のアンケートで、「しっかり取り組んでいる」生徒は、55%であった。「取り組む時もある」生徒を中心に、家庭学習の習慣化が定着するよう、意欲を喚起したい。長期休業中は「学習の記録」をつけさせ、充実した期間にするよう指導した。	授業が進路実現に向けての要であることを、粘り強く指導する。	
	将来を見据えて、適切な類型選択をさせる。	HRや面談を通して明確な進路目標を設定させ、類型選択につなげる。	進路学年集会を年間1回以上、進路HRを3回以上実施する。	A	A	A	進路HRをこれまでに3回実施した。9月末に、保護者、生徒、それぞれに向けて類型に関わる集会を実施した。	個々に応じた面談を重ね、主体的に設定した進路目標に向けて粘り強く努力するよう、指導を継続する。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策		
第2学年	基本的な生活習慣を確立させ、学校生活をさらに充実したものにさせる。	始業・授業開始時間の厳守と挨拶の励行を徹底する。	各HRや授業で指導を徹底し、各学期において不注意による遅刻5回以上の生徒をなくす。	A	A	4~1月の寝坊・不注意による遅刻を5回以上している生徒は15名(学年の4.2%)である。保護者とも連携をとりながら指導していきたい。	気になる生徒や欠席者の家庭に連絡をし、心身の状況等を確認する。全教員で粘り強く指導する。	・家庭学習の習慣化の定着に向けた指導が大切である。 ・生徒会や委員会、部活動、クラスの中で各自の良き個性が発揮できるよう、仲間づくりを行う。 ・進路情報を確実に提供できるようなる。またオープンキャンパスやインターンシップに積極的に参加させ、自己の適性に合った進路を考えさせる。	
		生徒理解に努め、保護者との連携を密にする。	学年便りを学期に2回・年間6回以上発行し、また行事予定を毎月配布することにより、保護者に学校の様子を知らせる。	A		学年便りを9回発行しており、行事計画も毎月配布している。今後も保護者との連携を密にしていきたい。	三者懇談や学校行事、PTA行事等、保護者の来校される機会に、知りたいことを把握できるようにする。		
	家庭学習の習慣を確立させ、進路実現に向けた準備をさせる。	授業の予習・復習を徹底させ、また定期考査・模擬テストのやり直しを促し、実力をつけさせる。	授業アンケートにおいて「授業の準備や課題等にしっかり取り組んでいる」生徒を80%以上にする。全員に模擬テストを4回以上受験させ、やり直しノートを提出させる。	B	B	A	12月のアンケートで「授業に意欲的に取り組んでいる」生徒は76.7%であった。模擬テスト後に、やり直しノートを提出させたが、全員提出とはならなかった。		授業の大切さを再認識させるため機会あるごとに伝える。模試の事後指導(やり直し)を徹底する。
		進路情報を確実に提供する。またオープンキャンパスやインターンシップに積極的に参加させ、自己の適性に合った進路を考えさせる。	進路HRを3回以上実施し、進路に関する集会を年間1回以上実施する。オープンキャンパスもしくはインターンシップに参加する生徒を80%以上にする。	A			計画通り、進路に関する集会、HRをそれぞれ実施している。オープンキャンパスはオンライン(WEB開催)が多かったが、「大学研究レポート」は、多くの生徒が提出した。		自ら調べ、行動する姿勢の確立に助力する。
	学校行事を通して、社会性や奉仕の精神、協調性を養う。	学校行事、生徒会活動、ボランティア活動、部活動等への積極的な参加を促し、集団の中での個の役割を自覚させる。	学級役員や各種行事における各自の役割を自覚させ、その責務を果たすよう働きかける。	A	A	A	学級での活動や、文化祭等の行事に参加する中で、それぞれが各自の役割を果たしている。		生徒会や委員会、部活動、クラスの中で各自の良き個性が発揮できるよう、仲間づくりを行う。
		修学旅行において、修学旅行委員とともに、その内容が充実したものになるよう計画を立てさせる。	修学旅行後のアンケートで、「満足した」生徒を90%にする。	A			当初の時期では実施できなかったが、12月に実施できた。肯定的な意見が99.4%だった。		次年度も新型コロナの状況次第だが、旅行者等と連絡を密にし、その内容を充実させていく。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果		成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
第3学年	基本的な生活習慣を確立させ、学校生活をさらに充実したものにす。	5分前行動を意識付けさせ、始業・授業開始時間を厳守させる。挨拶の励行を徹底する。	各HRや授業で指導を徹底し、各学期において不注意による遅刻5回以上の生徒をなくす。	B	A	寢坊などの不注意による遅刻が5回以上の生徒は26人いた。2学期の後半から体調不良による遅刻や欠席が急激に増加した。	健康管理の重要性を自覚させ、朝型の規則正しい生活を送らせる。時間を守らせる指導について、教員間、さらには保護者とも連携を取り、継続的に行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭学習の習慣化の定着に向けた指導が大切である。</li> <li>・定期考査や模擬試験を有効に活用し、普段の授業や日々の家庭学習が進路実現に繋がっていることを実感させる。</li> <li>・学校行事、生徒会活動、ボランティア活動、部活動等への積極的な参加を促し、集団の中での個の役割をさらに自覚させ、人権意識や社会性・協調性を養う。</li> </ul>
		生徒理解に努めるとともに、保護者との連携をさらに密にし、学校での活動や様子を保護者に周知する。	学年便りを年間5回以上発行し、また行事予定を毎月配布することにより、保護者に学校の様子を知らせる。	A		予定通り学年便りを発行した。行事計画も毎月配布し、学校の活動について、保護者への周知に努めた。	学校生活が円滑にいくように、繰り返し情報提供を行う。また三者懇談等の機会を利用し、保護者が学校に求めていることを把握する。	
	進路実現に向けて主体的に学習し、粘り強く取り組む姿勢を養う。	授業の予習・復習を徹底させ、主体的に授業に臨む姿勢を養う。また定期考査・模擬テストのやり直しを徹底させ、実力をつけさせる。	授業アンケートにおいて「授業の予習や課題等についてしっかり取り組んでいる」生徒を80%以上にす。	B	A	12月の授業アンケートで、「授業の予習や課題への取組」に対して「取り組んでいる」と答えた生徒は57.5%であった。	定期考査や模擬試験を有効に活用し、普段の授業や日々の家庭学習が進路実現に繋がっていることを実感させる。	
		進路情報や様々な模試の情報を確実に提供するとともに、その情報を、積極的に活用するよう促す。早期に進路目標を主体的に設定させ、その実現に向けて粘り強く取り組ませる。	進路HRを年間4回以上実施する。積極的に模試を受け、その結果を見直し分析するよう働きかける。個々に応じた面談や、授業の中での声かけ等で最後まで諦めず努力するよう指導する。	A		計画通り、進路HRを実施している。進路HRをはじめHRの時間やSHR、面談等で随時進路に関わる様々な情報を提供した。模試についても積極的に受験するよう働きかけた。	説明を聞き必要な情報を整理、活用するための基本的な姿勢、自己を客観視する力を高める。希望者対象の模試についても積極的に受験させ、学習の進捗を定期的に確認させる。	
		積極的に実力養成講座を受講するよう促す。また、進路資料や自習室を有効に利用させる。	実力養成講座の出席率を90%以上にし、無断欠席する生徒をなくす。	A		実力養成講座の出席率は90%以上であった。無断欠席する生徒もほとんどいなかった。	実力養成講座を進路意識の一層の向上につなげ、自分の進路、受験科目等を熟慮した上で実力養成講座に臨ませる。	
	学校行事を通して、人間力を育成し、全員が安心して登校できる環境作りに努める。	学校行事、生徒会活動、ボランティア活動、部活動等への積極的な参加を促し、集団の中での個の役割をさらに自覚させ、人権意識や社会性・協調性を養う。	学級役員や各種行事における3年生としての役割を自覚させ、その責務を最後まで果たすよう働きかける。また、人権HRを6回以上実施する。	A	A	多くの生徒が各種の行事やHR活動に積極的に参加し、役割を果たした。人権HRについても1、2学期で3回ずつ合計6回実施し、今後、人権課題に対して自身がどのように関わっていくかを考えさせ、3年間のまとめとした。	委員会、部活動、クラスの中でそれぞれの個性が発揮できるよう、仲間づくりを行う。人権学習については自身と人権課題との関わりについて、より実感させる必要がある。	
		教員間や保護者との連携はもちろんのこと、スクールカウンセラーや各種専門機関などとも情報交換・連携を図り、深い生徒理解に努める。	生徒についての情報を教員間で常に共有する。欠席や欠課生徒について、本人・保護者とのコミュニケーションを密にする。	A		欠席・欠課生徒について、保護者との連携を密にすることができた。また、学年会議等を通して、学年全体で情報を交換し、共有した。	より深い生徒理解を目指し、日頃から保護者とのコミュニケーションを大切にし、教員間での情報交換を密にする。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策	評価指標	自己評価結果			成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
教職員の働き方	校務全般における効率化や、仕事の分担化を図り、残業時間を減らす。	出退勤の管理システムで自己の勤務状態を把握し、業務が円滑に進むように工夫する。また、各部活動において休養日を設けるとともに、各部の顧問同士で調整し、負担軽減につなげる。	教職員の時間外従事時間が80時間を超えないようにする。部活動等においては、休日勤務、試合各月により休日の引率指導・業務の多寡はあるが、連続して超過勤務が続かないようにする。	B	B	A	部活動指導が主要因で2ヶ月平均の超過勤務が80時間を超えるケースが一件あった。使命感から生まれる長時間勤務と考えられるが、自身が疲弊するのであれば結果的には生徒のためにならない。	出退勤システムの記録を利用し客観的に勤務時間を把握し業務の適正化を図る。部活動においては顧問間での業務分担が必要。自らの持ち味を発揮できる職場づくりをめざす。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員間の業務の平準化や効率化を図るために、ICTを活用する。</li> <li>・教職員間の役割分担が平等に行われているか、一部の教職員に負担がかかりすぎているかを日々点検する。</li> <li>・部活動においては顧問間での業務分担を行う。</li> </ul>
	各教員が自らの健康に留意しつつ、効率的に業務をすすめる。	学年、分掌等において教員同士の相互支援やコミュニケーションをとり、業務の隙間時間等も有効活用しストレス軽減を図る。	ストレスチェック集団分析結果の総合健康リスクを前年度より上昇しないようにする。	A	A		ストレスチェックの学校全体における総合健康リスクは、昨年同様の分析結果であった。	管理職も含め教職員相互のコミュニケーションを大切にする。そして、学校内の課題の共有を図り改革を推進する。	